# 「潜在力」を「存在力」へ

～50年を伝承し、次の50年を構想する～

北九州青年会議所「NEXT50」運動指針

# はじめに「変革の火」を絶やさぬために。

「いま、JC運動は重大な危機に直面している」

そう感じないメンバーが多いとすれば、それは正にJCの危機的状況を意味しているのであり、さらにはその危機の根深さを証明していると思うのです。

「他の委員会がどういう目的でどういう事業をしようとしているのか判らない。だから事業への参加も動員という感覚でしかなく、とても負担に感じる」(会員アンケートより)

なるほど、本音でしょう。
しかし、このまま次の半世紀をスタートするわけにはいかない!

私たち『NEXT50』策定プロジェクトは、こうした状況を根本から解決すべく、様々な角度から議論を重ねてまいりました。

そこで抽出された根源的な問題は、まずメンバーにとって、JC運動を通じてこれまで自己成長を遂げた、あるいは遂げつつあるという手応えや期待感が希薄であるということ。もうひとつはJCの本分である社会貢献による達成感が絶対的に不足している、言い換えるならJCメンバーとしてのアイデンティティが確立できていないということです。

前者の問題解決にあたっては、今後JCを通じて自己実現を果たしていくメンバーが数多く輩出されることが望まれるでしょう。また、後者にあっては、近い将来、北九州JCの運動が本市の経済的ないしは文化的な発展に大いに寄与し、高い評価を得るといった実績を残すことが必要になると思います。

そのためには、前提としてメンバー一人ひとりがJC運動の本質をよく学び理解すること、そして自身の目標とJC運動の目標との繋がりを深く意識することから始めなければならないかもしれません。またJCがJCであり続けるためにも、青年らしい未来志向の目標を掲げ、伸びやかな反骨精神をもって、その実現に邁進できる力を呼び覚ますことが不可欠となるでしょう。

もちろん、いずれの課題も一朝一夕に解決できることではありません。しかし、だからこそ、こうした課題に取り組んだ私たちの足跡を残し、「明るい豊かな社会の創造」という理念をメンバー全員で共有できるような、長期的なまちの未来像を提示する必要があると考えるのです。

ここに、今後の北九州JCの指針として、北九州JC50年代運動指針『NEXT50』を策定します。「関係を見直す」、「システムを変える」、「社会を創る」。これらは、こうした問題点を立体的に捉えるための座標軸です。

現在、先輩諸氏の功績によって社会的な信用を得ている組織として、また創立50周年の式典で社会から惜しみない祝福を受けた者の責任として、未来のJCメンバーに確かな歴史を渡したいと願うばかりです。

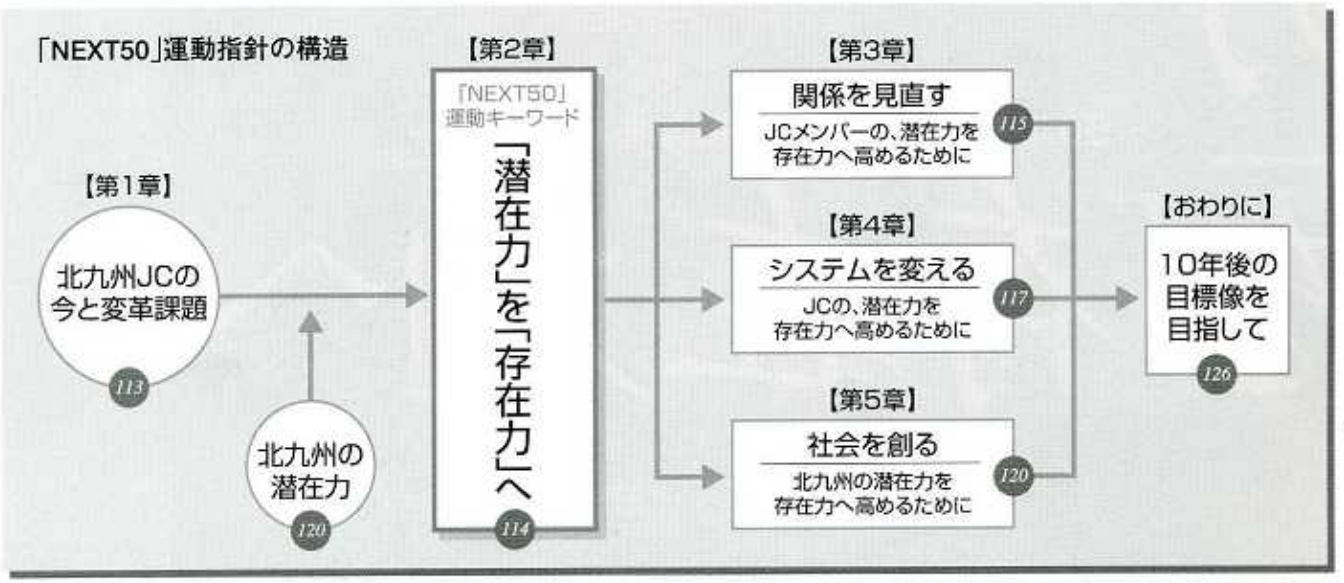
第51代理事長　渚田時栄

## ■「NEXT50」の位置づけと本指針の構造

# 本気でまちの先駆者になる!

「NEXT50」運動指針は、これからの北九州JC活動の基本となる方針です。この指針をもとに、北九州をもっと元気にし、住む人の笑顔を生み出す先駆者として、情熱的に活動を続けていきましょう!

この指針書は、下記の構造の通り、大きく5つの章に分かれています。それぞれの章で示している内容を私たち全員が共有し、北九州JCの、そしてこのまちの「潜在力」を「存在力」へ高めていくためのものです。




●の数字は掲載ページを示しています。

【第1章】

# 北九州JCの今と変革課題

## 良いところはどんどん伸ばし、問題点は克服して、JCの存在力を高めていこう!

北九州青年会議所は、これまでの50年の間、紫川浄化運動やまつり北九州(わっしょい百万夏まつりへ発展)、国際製鐵大学構想(KITAとして結実)など、若い力と発想で北九州の中に新しい動きを生みだしてきました。
このまちの未来の姿をビジョンとして描き、その実現に向けて、果敢に挑戦してきたこれまでの北九州JC。
公害や鉄冷え、産業の構造転換というさまざまな荒波を乗り越え、多くの実りを築いてこられた先輩達の熱き想いと行動力、挑戦の心をわたしたちは受け継いでいかなければなりません。

私たちの最大の強みは、まぎれもなく未来を切り拓く若い力が集まっていることです。
でも、50年という歴史を継承するなかで、「もしかして私たちはJCというカタチの継承にとらわれて、JC運動の原点や強みを見失ってはいないだろうか」、そんな危惧を感じているメンバーも多いのではないでしょうか。

今の私たちに必要なこと。それは、先輩達から受け継いだ良いところをどんどん伸ばすと同時に、問題点は積極的に克服し、JCメンバーにとって、このまちにとってのJCの存在力を高めていくことです。
そのためにまず、改めて北九州JCの強み(良い点)と弱み(問題点)をメンバー全員で共有し意識・組織・行動共に変革していきます。

### ●対外的強み(良い点)

○先輩方の実績による社会的信用がある。
○若い力に対して期待されている。
○JCの国内・世界的ネットワークは他の団体にはない。
○社会的・政治的に中立。利害関係を持たない。
他

### ●内部的強み(良い点)

○若い力が揃っている。
○派閥がなく、仲間意識が強い。
○利害関係がなく、本音の議論ができる。
○仕事では体験できない様々な経験ができる。
他

### ●対外的弱み(問題点)

●政策立案能力に課題がある。
●JCって何をやっている団体なのか知らない人が多い。(フラッグシップ事業が明確でない)
●毎年コロコロ事業がかわるので、協働で長期的事業が行いにくい。
●本業ではないので実施主体になりにくい。言いっぱなしになりやすい。 他

### ●内部的弱み(問題点)

●主体的に参加しているメンバーが少ない。
●事業が多く運営システムが旧態依然。
●まちづくりについて熱く語るメンバーが少ない。
●JCの本質を理解しているのか疑問。
●JCと会社や家庭を切り離して考える人が多い。
●理事希望者が少ない。
●日本、地区、ブロックに出向する風土がない。
●日本JCなどの役員が出てこない。 他

### ■ 変革課題 ■

JCメンバーにとって、このまちにとっての北九州JCの「存在力」を高めるため、対外的・内部的弱み(問題点)を払拭していきます。
そしてそのために、メンバーの意識変革(関係を見直す)、組織のシステム変革(システムを変える)、まちづくりの指針構築(社会を創る)などの課題に対し具体策をたて、その実現に向けて、メンバー一丸となって本気で取り組みます。

【第2章】 「NEXT50」キーワード

# 「潜在力」を「存在力」へ

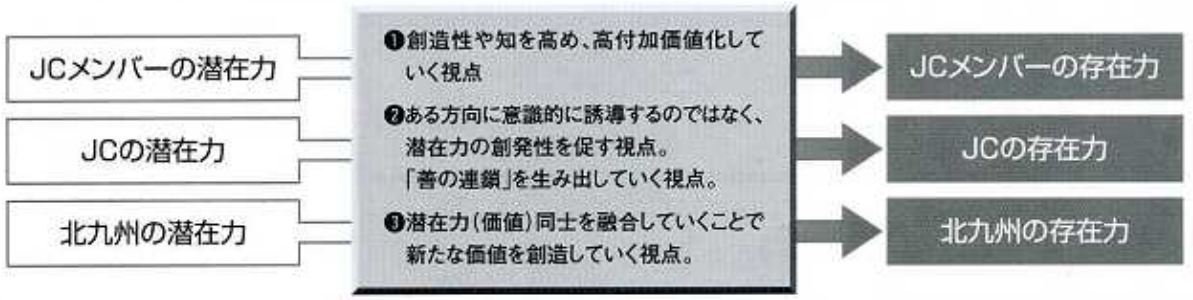
「潜在力」、
それは眠っている可能性。
「存在力」、
それは自分の価値を高め、確固たるポジションを築くこと。

北九州JCやそのメンバー、そして北九州というこのまちは、
まだまだ自らの価値や力を
十二分に発揮できていないのではないでしょうか。
私たちには、まだまだ眠っている大きな可能性が
たくさんあるのではないでしょうか。

自らの、そしてまちの可能性を信じ、
「潜在力」を「存在力」へ高めていく。
このことを合い言葉に、北九州JCは、このまちの先駆者として、
自分たち自身や北九州に眠っている可能性をいち早く発見し、
情熱を持って開花させていきます！

■「潜在力」を「存在力」に高めていくための視点■

こんな視点で「潜在力」を「存在力」へ高めていきます！




上記の3つの視点で、北九州JCメンバー、北九州JC、そして北九州の「潜在力」を「存在力」へ高めていきます。
そのための具体的取り組みや提言は、次頁以降の「関係を見直す」「システムを変える」「社会を創る」で示しています。

【第3章】

# 関係を見直す

## JCメンバー自身の、そしてJCそのものの「潜在力」を「存在力」へ高めるために、メンバー一人ひとりがJCとの関わり方やJCの価値を見直そう!

## あなたにとってJCって何ですか？

JCは、メンバー一人ひとりが個人の大切な時間を使って活動しています。誰もが一度は、JC活動に疑問を感じたことがあるのではないでしょうか。でも、考えてみてください。若い力を思いきり発揮して、まちや社会のことを真剣に考えて活動することなんて、そうそうあるものではありません。JCでなら、それも可能です。

実際、これまでの50年の間、北九州JCは、市民やまちを巻き込み、北九州に新しい風を吹き込んできました。

自己成長の手応えや社会貢献による達成感、そして仲間との連帯による真の友情...

JC活動は、本気で取り組むものに多くの価値を与えてくれます。

せっかく貴重な時間を使ってJC活動をするのだから、多くのことを吸収しましょう!

あなたにとって、JCは、きっと自分を高める大切なよりどころとなるはずです。

### 体験者は語る! JCで自分を高める

### 社会人大学としての青年会議所

『社会人』とは何だろう？

誰もが、学生を終え働き始めると『社会人』と呼ばれるが、本当に『社会人』なのだろうか？私は、青年会議所に入会してはじめて『社会人』というものを体験したような気がします。実際、『社会人』といわれる多くの人々は、自分達の住む身近な地域のことを、果たしてどれだけ真剣にとらえ、また地域社会との関わりを持っているでしょうか？少なくとも私は入会以前、地域社会とどう関われば良いのかさえ解りませんでした。

皆様もご承知のとおりに、青年会議所は『明るい豊かな社会の実現』をテーマに活力ある地域を創造するまちづくり事業や、次世代の健全な社会のあり方を提唱するエコエコ運動、国際組織として国益を越えた友情を有する国際交流事業等、様々な事業を展開しております。私は、参加させて頂いたそれぞれの事業の中で、本気で考え、真剣に議論し、情熱を持って行動することで、自分達の住む地域社会の実態や、日本の社会の抱える問題、アジア社会共通の課題など多くのことを学ばせていただきました。その上、多くのメンバーと利害を越えた人間関係をも築く事ができました。

青年会議所での活動は、自らが勇気を持って積極的に参加することによって、仕事だけでは決して得られない多くの友情と社会性を与えてくれます。また、様々な業種の青年経済人の集まりということもあり、他業種の情報や、個性に富む多才なメンバーと事業を取り組む中で、多くの考え方を学び、物事を広角的に捉え判断できるようになりました。現在進行形の身として大義を語ることはできませんが、私自身の環境変化として入会当時の下請け中心の地場製造業から、自社製品を開発し、メーカーとして全国に市場を求められるようになれたことはその効果だと思っております。今後も、青年会議所活動に真剣に取り組み、『社会人』として、地域社会の健全な発展の一助となれるようがんばっていきたいと思います。

1998年入会　斉藤智樹

## 活かさない手はない! JCだから得られるこんなメリット

### ❶ 自分自身を高めるための修練!

■社会への奉仕を志す者は、まず自分自身の修養に努め、良識ある地域社会人として、また指導者たる誇りを持たなければなりません。こうした個人や集団の指導力開発とは実践的な活動の中で養成されていくものです。

■そこで、JCではメンバーが職場や日常生活などでは体験できないことや、自分自身が苦手としていることにチャレンジしてもらい、自分自身の修練に努めていただきます。

■その中で、リーダーシップを磨いていただき、また今まで気づかなかった自分の新たな能力・可能性を知っていただくのです。

■JC事業の実践により、"人"として次のステージに昇ることができるのです。

### ❷ 社会とのつながりが深まる奉仕!

■JCでは、発足当初から、その強い団結力と勇気をもって常に時代を先取りし、自らの手で積極的に社会への奉仕を行ってきました。この奉仕活動が地域社会の発展、さらには国家、世界の平和に貢献しているのです。

■例えば、北九州JCのメンバーの多くがJCに入会した後に北九州市への関心が高まり、本気でこのまちのことを考えるようになったと口にしています。さらに奉仕活動、事業活動を通じ、以前にもまして北九州のことが好きになり、今までは見えなかった北九州が見えるようになります。そして能動的・積極的に住民活動を行うようになり、地域住民としての充実感を体感できるようになります。

■JCを通じて、地域社会への貢献を多くのメンバーが実感しています。

### ❸ 他では得られない友情!

■個人の力には限界があり、個人ではできないことも集団の力をもってすれば可能です。その力をフルに発揮するには、個人の相互の理解と友情がなければ成功しません。

■そこで、北九州JCでは、委員会内でのメンバーの相互理解と友情を深めることを委員会活動の目的の一つとしています。本音で語り合える友人を一人でも多く作っていただくよう委員長等のスタッフは組織運営を心掛けています。

■また、メンバーは福岡ブロック、九州地区、日本JC、JCI に出向し、北九州JC以外のJCメンバーとも交流を図っています。北九州JCの組織自体としては、国外の3つのJCと姉妹締結をし、古くから国家を超えて友情を育み、到津動物園の小象の誘致や児童交換（短期のホームステイ）等の事業を行っています。

■この友情の結びつきが都市から都市へ、国から国へ、そして世界中へ広がり、ついには大きな人類愛に高められ、世界の平和に貢献しているのです。

## この50年の成果は、勇気と情熱とチャレンジから生まれた。

情熱を持ってなせば成る。
そのことを証明する
先輩たちの活動の一部をご紹介します。

### 小倉祇園太鼓像

北九州市では東京渋谷の「ハチ公」や上野の「西郷像」よりも有名な"待ち合わせの見印"であるこの像は、北九州JC(当時小倉JC)創生期の一大事業でした。「奉仕事業」として小倉駅内に「ゴミ箱の寄贈を」との発案が、侃侃諤諤議論の末、祇園太鼓像の建立に代わっていったのです。建立された昭和34年の小倉JCの会員は20名余。少ない人数でありながら、人一倍の郷土愛と行動力を持った先輩たちは、北九州市の「名所」を創り上げたのです。駅舎建て替えにより新幹線口に移転していましたが、平成14年に現在の位置に再移転し、市を代表するモニュメントとして輝きを取り戻しました。

### 紫川浄化運動

昭和43年。紫川分流の川岸に十数年間、ゴミと悪臭に義憤を感じながら、町内会を通じて紫川の浄化運動を行っていた一人のJCメンバーが住んでいました。たった一人で川に入り、ゴミと闘ったりもしたそうです。そのメンバーが個人の力の限界を感じ、JCの仲間に相談したことがきっかけで始まったのがこの運動です。自ら考え、自ら立ち上がり、自ら行動し、JCで仲間を得て、事業が開始されました。そして、のちに市民を巻き込んだ運動へと大きく発展しました。一人の熱き想いが、市民のモラルの啓発にとどまらず、北九州市の都市環境、都市整備にも大きな影響を与えたのです。

### まつり北九州

5市合併による北九州市誕生以降も旧市意識がはびこり、市民として一体感が持てないでいることに不安を感じていたJCメンバーの、「自分たちが生まれ育ち、自分たちの子供も「ふるさと」と呼ぶ北九州市を、心から誇りにし愛し続けるまちにしたい」という、熱い想いから誕生したのがこの事業でした。昭和48年の事業開始以来、毎年議論を重ね、時代にあった内容に改善し市民への定着を図ってきました。現在は、主催を市に譲渡し「わっしょい百万夏まつり」と名称を変え、さらにスケールが大きくなりましたが、今年も全国的にブームとなっている「よさこい踊り」を新たに企画するなどJCが大きく関与しています。

### KITA 北九州国際技術協力協会

昭和53年9月、JCが主催した市民集会での提言「国際製鐵大学構想」は、北九州市の経済の恒久的浮揚を求めての提言であり、鉄冷えのまちといわれた北九州市に久しぶりに明るい話題を提供しました。ただし、当初、マスコミの反応は「「二代目の道楽といわれたJC」がこんな提言をして、はたしてどこまでできるか今後の課題である」と辛らつを極めました。当時のメンバーはこの記事を見てガセン闘志が湧いたと記録が残っています。その後、OBやJICA、新日鉄、北九州市などの協力を得て、財団法人国際研修協会(KITA)が設立されました。北九州市が国際的な技術研修・研究都市へと成長を模索するきっかけとなる事業でした。

### IFP 児童交換事業

昭和45年2月、台北JCとの姉妹JC発足と同時にはじめられ、今日まで30年以上も継続している児童交換の事業です。姉妹JC発足当時、日本政府は中国との国交回復を志向しており、北九州JCに対して外部からの大きな圧力が加わりました。しかし、当時のメンバーはJC活動の真意、正しさを説いてまわり理解を求め、JCの掲げる信条「友情は国家主権に優先する」という言葉を守り、この事業を開始したのです。この事業を毎年継続することによって現役メンバーは、「信条を曲げない勇気」を再確認できるのです。

50年の歴史の間には、上記以外にもさまざまな事業を企画、実施してきました。紙面の関係上、ここで全てをご紹介できませんでしたが、成功したと言われる事業の要因を検証したところ、いずれも最初から大上段に構え、肩肘張って企画立案したものではないということがわかりました。最初はたとえ少人数の中や、小さな身近な問題であっても、真剣に考え、真摯に地道に、一生懸命情熱を持って取り組み、その事業で自分を修練するつもりで活動した結果、事業も自分自身も成長することができ、今日の高い評価に至っているのです。50年の歴史を振り返ることによって、「勇気と情熱さえ忘れなければ必ず大きな成功が得られる」、ということを知ることができます。

先輩から喝!

### 失敗を恐れず未来に向けて行動を!

平成13年度卒業
阿比留　依子

組織がブランドとして名を馳せ、その信用のもとに全てがうまく運ぶ時代が終わった今、物質文化が異常に進歩した反面、精神文化は置き去りにされ、人は未来への方向性を見失ってしまいました。

JCの活動においてもその知名度だけでは改革の旗を振りかざしても、もはや人は動きません。だからこそ今、JCマンである前に一人の人間としてあるべき方向性を見つめ直し、自分自身を確固たる「ブランド」として確立することが大切ではないでしょうか。その上でメンバー全員が一つのビジョンを組織的に共有できれば、JCは今よりもっと揺るぎない強いブランドとなるでしょう。また、市民を巻き込んだその行動、そして拠点となる北九州のまちも自ずとパワーブランド都市として広く認知され、市民の誇れるまちづくりが実現のものとなるのではないでしょうか。

最後に、常に失敗を恐れず情熱を持って行動しつづける皆様の夢がNEXT50さらにNEXT100へと実を結ばれることを心からご祈念申し上げます。

## JCに熱くなろう!次世代を創造するイノベーター(先駆者)として

私たち現役メンバーは今、各々が熱いと感じる事業を行っているのでしょうか。
自分ではない誰かが変えてくれることを心の中で願ってはいないでしょうか。
先輩方から受け継いだ「情熱」と「行動力」というDNAを眠らせてはいないでしょうか。
私たちJCは、未来を切り拓く若い力の集まりです。
失敗を恐れず、情熱を持って、このまちの未来のために、埋もれている多くの可能性を掘り出し、開花させなければなりません。
『誰かがやるだろう』ではなく『私が成し遂げる!』この強い気持ちを常に持ち、北九州の潜在力を存在力へと高め、次世代へと繋げていかなければならないのです。
何も大げさな事では無いのです。身近にある小さな問題を真剣に考え、情熱を持って関わって行けばよいのです。
さあ、動き出そうではありませんか、
次世代に、このまちを胸を張って手渡すために、このまちの、この時代のイノベーターとして。

【第4章】

# システムを変える

## 合理的でスピーディーな組織運営と時代の流れにあった付加価値の高い事業を行い、JCの「潜在力」を「存在力」へ高めていこう!

北九州JCの「潜在力」を「存在力」に高めるために従来のシステムを見直します。目標は合理的でスピーディーな組織運営と時代の流れにあった付加価値の高い事業運営。そのために、従来の運営システムの問題点を変革していきます。

システム変革その1

### 審議および協議の効率化・会議の変革

●問題点　○協議・審議のプロセスが複雑。理事会での審議にかかる時間が長く、スムーズに事が運ばない。

●変革内容　会議は事業の質を高めるためにある!

**■審議および協議の効率化**

□現状では、正副・常任・理事会で同じような内容の協議や審議が繰り返され、必要以上に時間を費している。そこで、協議・審議内容の質を高め、効率化するため、正副・常任・理事会における協議・審議を以下のように見直す。

□正副・常任理事会の協議の中で事業立案の精度を徹底的に高め、理事会協議時には正副・常任から提示された協議事項の問題点や改善方法等、内容の絞り込みを行って協議を行う。理事会で協議された問題点や改善策等を正副・常任理事会で審議し、事業内容等を完成させ、理事会での審議はその最終決議をとる場とする。

□また、効果的かつ質の高い事業展開を行うと同時に、スケジュールに切迫されながらバタバタと事業実施を行うことにならないために、事業実施に余裕を持てるよう協議・審議を計画化する。

**■理事メンバーによる議案の事前チェック**

□実際の議案作成時期を早め、期限を守ることにより理事メンバー全員が事前に提出議案の内容検討を行えるようにする。これにより、建設的かつスムーズな理事会運営が行える。

□さらにスムーズな会議の運営を図るために、提出議案チェック後、理事会開催までにメール等で理事メンバー相互による質問やアドバイスのやり取りを実施する。

システム変革その2

### 事業計画・引継体制の変革

●問題点　○単年度事業の弊害が大きい。事業の引継体制が明確でなく、外部団体への対応も適切でない。

●変革内容

**■議案作成・事業計画書内容の変革**

□事業の目的・コンセプト、事業を実施する中で何をどう変えたいのかをしっかりと表現した事業計画書を作成する。

□理事会でもこれを最大の議論の対象とする。

□次年度以降に引き継ぐため、事業をさらにブラッシュアップさせるために、事業報告に重きを置き作成する。準備段階から実施、反省まで、外部関係団体とどのような連携を取って実施したか等、次年度以降への引継、参考資料として有効なものとなることを念頭において作成する。

**■継続事業か単年度事業かを明確化**

□年当初及び事業毎の事業計画書に何年間かに及ぶ「継続事業」か、または「単年度事業」かを記載する。

□継続事業の場合は、外部関係団体への引継ぎ、またはLOM内の対応を明確にする。

**■本年度と次年度の引継会議**

□10月頃(次年度理事長決定直後)に、本年度理事と次年度理事の引継会議を実施する。

□引継会議は、本年度実施した事業の内容(人的な繋がりや実施上の問題点、やり残したこと等)を詳細に引き継ぐことを目的とする。

**■例会での事業実施報告(PR)**

□現在、事業実施のPRは行っているが、実施後はお礼のみで終わっている。実施後に担当委員会が反省点を含めた実施の報告を行い、事業の質の向上、メンバー全体のスキルアップにつなげていく。

システム変革その3

## データ蓄積・活用の変革

●問題点　○事業の結果や効果等、過去のデータがあまり残っておらず、引継が上手くできていない。無駄が多い。

●変革内容

■データベースの構築

□過去の事業の報告事項等をデータベース化し、例えば、理事メンバーが事業計画を作成する際に過去の関連事業がスムーズに検索できるなど、検索システムを改善する。

□現在の「事業年度→委員会→事業名」の縦軸検索と、事業内容(例えば継続事業→青少年→積み木の箱等)別の横軸検索ができる仕組みを構築する。

□報告議案は過去5年間データ保存し、いつでも閲覧できる状態にする。個人データにおいても複数の条件でLOM資産となりうる情報を機密に保管、活用するシステムを構築する。

■デジタルデータでの保存

□データベース構築と併せて、過去の事業の書類や写真をデジタルデータに変換し、保存・活用する仕組みをつくる。

例)スキャナー機能付きカラーコピー→ゼロックス、PCとLAN接続、PCインストールソフト「ゼロックスのドキュワークス」を使用し、紙資料はスキャニングしてドキュワークス文書化で保存。
この文書は画像データ等に変換が可能。ワード・エクセル等で作成した文書もドキュワークス文書化することが容易(アクロバットの変換と同様の方式)。またデータはアクロバット文書に比べてかなり軽い。

システム変革その4

## 事業の質向上・事業評価の変革

●問題点　○1委員会の事業量が多く、メンバーの負担感が増し、1つの事業への取り組む力が弱くなる。
○事業の質を高められない。

●変革内容

■委員会数等の見直し

□メンバーの委員会活動への取り組み力を高めること、そして事業の質を高めることを目的に、委員会の数や理事の数、また委員会の事業数などを見直し、検討していく。

□メンバーの資質、数をふまえ、特定のメンバーへの過度な負担を強いることがないよう配慮しながら、しがらみにとらわれることなく、しかし大義は忘れることなく、慎重かつ大胆にLOMにとり適切な事業数を決定する。

■事業評価会議の実施

□次年度以降引き続き実行すべき事業か、止めるべき事業なのかを検討する会議を実施し、事業の効果的展開を図る。

□事業の評価は、外部へのインパクトの度合い、また、メンバーの能力向上に役立ったかを重要視する。

■事業評価と達成感づくり

□協議・審議の議案より報告議案の重要度を再認識する。

□プロセスと結果の評価基準を褒章制度にバランスよく組み込み、事業評価と達成感を絶対評価していける仕組みを作る。

システム変革その5

## 外部とのネットワークの変革

●問題点　○事業を通して関係を持っているわりに、JC活動や事業の質を高めるための外部団体とのネットワークが乏しい。
○専門性の高い事業を行う体制が整っていない。

●変革内容

■ネットワークづくり

□外部ブレーンとのネットワークを作り、JC活動や事業の質を高める仕組み、専門性の高い事業を可能にする仕組みを作る。

□準会員制度を設け、委員会や各会議にオブザーバーとして参加してもらい、客観的な意見をJCに取り込めるようにする。

■顧問、アドバイザーの設置

□商工会議所役員や地場の上場企業、地元選出の議員、新聞社・TVなどのマスコミ関係者などを顧問とし、外部インパクトを大きくするための協力体制を強固なものにする。

□専門性が必要な場合は、アドバイザー等とコンサルタント契約を結び、運動の効果を高めていく。

■関係先リストの作成(データベース構築)

□事業を通じて繋いだ外部とのパイプも、次年度の引き継ぎ後はとぎれがちなのが現状。この点をクリアにするため関係先データベースを構築する。

■日本JC会頭、JCI会頭を輩出しよう

□もちろん会頭になることが目的ではない。会頭になることによって世界的ネットワークが広がる。最先端の情報も入る。それらをLOMや新しい北九州づくりに生かしていく。そのために理事長を36歳までに経験させる。

システム変革その6

## メンバーの潜在力発揮変革

●問題点　○委員会組織にメンバー個人の得意分野等が生かされていない。

●変革内容

■メンバーの得意分野を把握・活用

□メンバー個人の得意分野を把握し、データ化、データ管理を行う。そのデータを活用して委員会編成時に適材適所の人員配置を行う。

■研修方法・内容の見直し

□会議運営方法の研修を実施。効率的かつ効果的な諸会議運営の研修は、JCでは勿論のこと会社においても即役に立つ。
また新入会員も基本知識として身につけておく必要があるため、毎年実施する。

□指導力開発プログラムを実施していく。(システム変革その8を参照のこと)

■出向制度の改革

□外郭団体への出向は正副にかたよることをせず、理事や一般メンバーも自由に出向できるようにする。

□出向先の報告を理事会の中で設け、そこから波及する事業展開の検討や情報の収集、メンバーへの情報発信等を行う仕組みを作る。

システム変革その7

## 理事及び委員長の選考変革

●問題点　○理事立候補の制度はあるが立候補するメンバーがいない。現状としては、理事長予定者が指名し役員選考委員会に上程している。理事としての威厳がない。

○理事長予定者による理事予定者の指名に時間差が生じるため、希望する事業の担当とならないことも多く、責任の大きさや負担ばかりを感じ、理事や委員長になりたがらない。

○自覚と見識を備えた理事やリーダーシップあふれる委員長を育成するシステムが不足している。

●変革内容

■立候補しやすい風土の醸成。理事の価値を高める

□役員選考委員は理事を希望するメンバーや理事にふさわしいメンバーの調査を行い、理事候補者の立候補を促す。

□理事であるということは、事業遂行に必要な知識および指導力などを兼ね備えた優秀な人材であるということ。
多くのメンバーが理事を希望するような状況づくりを行うと同時に、競争の原理を働かせる。

■理事の担当委員会決定システムの見直し

□役員選考委員会において理事予定者の選任が終了⇒配属委員会会議を開催・・・希望や抱負等をヒヤリング⇒担当委員会の決定というシステムに変革する。

■理事及び委員長の研修の実施

□理事スタッフセミナーだけでなく、JCスクール(理事編)、委員会運営研修を年間定期的に開催する。

システム変革その8

## 指導力開発研修の継続と変革

●問題点　○JCには人間力開発や指導力開発プログラム等、メンバーの資質向上につながる研修プログラムが数多く蓄積されているが、現在の北九州JCでは社会を対象とした事業が多い為、研修系の委員会が毎年継続されていない。

●変革内容

■特別育成チームを編成

□日本JCの研修コーチ養成システムのライセンス取得に力を入れ、取得したメンバーが「特別育成チーム」を編成する。

■研修支援チームを設立

□研修系委員会がない年度においても、研修プログラムをLOMメンバーに紹介できるしくみを構築する。
例:じゃがいもくらぶや野球部のようにLOM組織とは別に「研修支援チーム」を設立する。

■研修例会の実施

□多くのメンバーが受講できるように、研修系委員会や研修支援チームによる研修例会を開催する。

## 大胆な発想で先駆者となるべく運営体制、システムを変えていく!

「システムを変えること」は、大きなエネルギーを要します。しかし、今のシステムは決してベストなものではありません。メンバー自身の成長が、まちの成長に結びつくことを信じて、思い切って運営体制やシステムを見直し、変革していきます。そのためにはメンバー一人ひとりの自覚と力が必要です。個々の能力を発揮しあい、ベストなシステムを築いていきましょう。それはきっと自分たちの成長や達成感にもつながるはずです。

【第5章】

# 社会を創る

## このまちの眠っている可能性をいち早く発見し、育て、まちの「存在力」を高めていこう!

北九州JCは、このまちの価値を高め、北九州を元気にする先駆者として、北九州の課題を見据え、眠っているまちの潜在力を発見し、情熱をもって育てていきます。

### ●北九州の潜在力●

■「公害のまち」という負のイメージから「環境先進都市」というプラスのイメージへと変貌を遂げつつある北九州市。まだまだ発展途上段階だが、「環境先進都市」という財産を都市ブランドとして高めることが可能。

■CCAは、現代アートという分野では世界的にも有名な存在。普遍化、広範囲化の方向性をもてば今後の開花が期待されるソフトの芽が数多くある。

■小学校区ごとに地域福祉センターを設け、きめ細かな福祉施策がとれるのと同時に、地域住民・自治会・企業・学校・行政などが連携・協働して「福祉のまちづくり」を行う、北九州方式という独自の福祉システムを有している。

■市が環境、福祉、教育等で北九州色を出した取り組みを積極的に進めている。

■行政区域を超えて、海峡・観光というキーワードで他市と連携した取り組みが進みはじめた。

■新北九州空港、響灘ハブポート、東九州軸の高速道路整備など、産業力を高めるインフラ整備が進んでいる。など・・・・・。

## 北九州JCが考える 北九州の「潜在力」を「存在力」へ高めるために必要なこと

北九州には、まだまだ生かされていない多くの可能性が眠っています。
それらの「存在力」を高めると同時に、個々の「存在力」の相乗効果を生みだし、まち全体としての「存在力」を高めることが求められます。
そのためには、様々な分野の「潜在力」を包括的に見つめ、プロデュースし、育てていく存在が必要です。

北九州JCは、「知」「産業」「観光」など、可能性が眠るすべての分野の「潜在力」を発見し、育てると同時に、それらの価値を統合する「都市の総合力」を高める具体的取り組みをプロデュース・実施していきます。

- 文化を生かした活性化力
- メイド・イン・北九州力
- 現代アート力
- I Love 北九州力
- 北九州方式の教育力
- 環境と経済の同調力
- 国益を超えた友情力
- 政策提案力
- 自己表現力
- 美しいまちづくり力
- 関門海峡力

↓

地域資源や文化の産業化
まちづくり・郷土愛づくり 124・125頁

北九州JCが取り組む「社会を創る」具体的取り組み概要については121、122、123ページをご覧ください。

社会を創るその1
## 「文化を生かした活性化力」を存在力へ

### CLO(文化版TLO)構想!

●北九州ブランドと平行してCLO(文化版TLO)構想を実現していきたいと考えています。

●TLO(Technology Licensing Organization)とは、大学等での研究成果や新技術を産業界で活用するための橋渡しをする機関のことです。

●「CLO(文化版TLO)構想」とは、テクノロジーではなく、例えば小笠原礼法や長崎街道をはじめとした北九州の文化的財産を観光や商品づくり等の産業やまちづくりに生かすための橋渡しを行うというものです。

●北九州JCでは、北九州の文化を蓄積(データベース化)して、ほかの地域との相違点の分析等を行い、新たな産業の萌芽にまで昇華していく、「CLO(文化版TLO)構想」に取り組みます。

●この「CLO(文化版TLO)構想」の実現を通して、歴史や文化を産業やまちづくり等へと生かしていき、まちの新たな発展の可能性を追求したいと考えています。

尚、CLOについては124、125頁でも説明しています。

社会を創るその2
## 「メイド・イン・北九州力」を存在力へ

### 北九州ブランド推進協議会構想!

●北九州JCは、内外に向け北九州を発信するシステム(地域ブランド)が必要だと強く思っています。

●地域ブランドを生み、育てるために各団体、専門家、学校、行政等が相互の特質を有機的に結合させ、優れた素材を「メイド・イン・北九州」としてブランド化できる組織を設立し、機能させる。これが北九州JCの考える「北九州ブランド推進協議会構想」です。

●例えば、日本の礼儀作法として浸透している「小笠原礼法」の発祥の地は、北九州であるにもかかわらず北九州から全国に発信されていません。

●このような北九州の潜在力(都市力)を「メイド・イン・北九州」(存在力)として発信し、内外共にブランドとして認められれば、多くの人が北九州に流入する他、地元経済等の活性化につながります。

社会を創るその3
## 「現代アート力」を存在力へ

### 先端学融合ラボラトリー構想!

●北九州JCは、北九州の地に付加価値の高い産業と感性豊かな都市空間の実現、それを生み出す創造性豊かな人材の育成を目的とした運動を展開しています。

●その具体的な取り組みとして、1997年に設立された日本初の現代美術専門の公的学習・研究機関「現代美術センター・CCA北九州」と連携して、「先端学融合ラボラトリー(以下、CCAラボ)構想」を提唱し、その実現を目指します。

●「CCAラボ構想」は、アーティストや研究者・技術者が集い、融合・共鳴する中で新たな価値を創造する「コラボレーション機能」と、その創造課程に次代を担う人材が参画することにより創造性豊かな人づくりを図る「インキュベート(孵化)機能」から成ります。

●この運動により、既存の価値観や枠組みにとらわれないこのまちの新たな価値づくりや人づくりを進めていきます。

社会を創るその4
## 「I LOVE北九州力」を存在力へ

### (仮称)北九州っ子検定で郷土愛を育てる!

●まちづくりに力を注ぐためには、まず自分のまちを知り、愛し、誇りを持つことが必要です。

●北九州への郷土愛やまちへの誇りを育てることを目的に「(仮称)北九州っ子検定」を立ち上げ、実施していきます。

■この検定では、まず、北九州の資源、財産、魅力をさまざまな視点から掘り起こし、このまちについて学ぶ冊子やHPを作成します。

■この冊子やHPをもとに、北九州について学んでいただき、北九州についての質問に答える検定試験を実施します。その結果をもとに、北九州についての知識度合いに応じた、例えば英検のような級を決めるという展開です。

●「(仮称)北九州っ子検定」を通して、市民をはじめ、多くの方々に北九州の魅力を再確認いただき、郷土愛を育てるきっかけにしたいと考えます。

●また、この検定の級保持者には、観光案内等で活躍していただく場を作っていくことも考えられます。

社会を創るその5
## 「北九州方式の教育力」を存在力へ

### 小笠原礼法を教育に生かす！

●子ども達にとって重要なことは、知識や知恵、技術を学ぶだけでなく、人が暮らしていく上で、人との関わりを築いていく上で最も基本となる歴史や伝統文化、そして礼儀や躾を学ぶことだと考えます。

●ほとんど生かされていませんが、北九州市は礼法で知られる小笠原家の総領家(本家)があったという大きな価値を持っています。

●北九州JCは、この価値をクローズアップし、小笠原礼法を生かした北九州方式の教育を確立していきます。

■例えば、新しい地域のコミュニティとして注目したいスポーツクラブチームの中で、親たち、子どもたちに対して、小笠原礼法に基づく教育を行っていきます。

■学校教育や地域教育の中で小笠原礼法に基づく躾、礼儀の教育ができないか検討を進めていきます。

社会を創るその6
## 「環境と経済の同調力」を存在力へ

### 「ストック型社会」づくりへの挑戦！

●「ストック型社会」とは、使い捨て消費を行うのではなく、世代を越えて受け継ぎ長きにわたり使用できるモノをつくり、地球と自然の再生産能力にあうように資源を利用する社会のことです。

●自然林が伐採されてから再び元の姿に戻るには200年必要だと言われています。例えば、この自然林が再生できる期間に併せて200年使用できる家をつくり、ヨーロッパのように何世代にもわたり大切に使用すること等は「ストック型社会」の一例です。

●北九州JCは、「ストック型社会」の実現を指し「エコエコ(ECONOMY AS ECOLOGY)運動」を行ってきました。
今後は、この運動をさらに発展させ、次世代システム研究会と連携してストック型社会づくりのため以下の取り組みを行っていきます。

■トータルリビングショーやエコテクノフェア等のコンベンションでの情報発信を進めます。

■主婦を中心とした市民や子どもたちにストック型社会への転換の必要性を理解してもらうための教育プログラムやセミナー等を開催します。また小冊子を作成します。

■ストック型社会を実現するためには、税制や法制など社会システムを同時に変えていかなければなりません。政策の有効性を検証するためにも「ストック型社会実現特区」を提言します。

社会を創るその7
## 「国益を超えた友情力」を存在力へ

### 「交流」から「協働」へ！

●これからの国際交流は人的交流だけで終わるのではなく、姉妹関係を結ぶ各JCメンバーと共に身近な問題～地球規模の問題解決に協力しあう「協働」の時代へと変化させていかなければなりません。この考え方を基本に、今後は姉妹JC関係の台北JC・富平JCをはじめ、各国都市のJCと「協働」する関係づくりと事業を展開していきます。

■北九州の活性化に繋がる事業の構築
メンバー同士が海外ビジネスの展開やビジネスヒントとして役立てる事業、また新北九州空港や響灘ハブポートの利用を促進し、北九州の潜在力を広くPRすることを目的とした事業を展開します。

■台北市との友好都市関係を目指して
1972年の日中国交回復以降も様々な困難を乗り越えて固い絆を守り続けてきた台北JCとの姉妹関係は北九州JCの誇りです。この台北JCとの姉妹関係を基盤に「都市と都市」「市民と市民」の交流促進を目的とした台北市・北九州市の友好都市関係構築のための事業を展開します。

■ピースプロジェクトの構築
貧困者、難民、環境問題等の地球規模で解決すべき問題に対し、国内外JCや国際NGOと連携を進めながら事業を展開していきます。

社会を創るその8
## 「政策提案力」を存在力へ

### 真の民主主義実現へ向けて！

●以下の取り組みを中心に、政治は市民が担うという民主主義の基本を一般市民に向け改めて発信し、「民意が反映された政治システムの構築」を行っていきます。

■公開討論会の定期的な実施
選挙が行われる時だけでなく、定期的に広く政治家・政党に働きかけ、今の政治の現状と進んでいく方向性がわかる公開討論会を実施します。

■模擬選挙の実施
高校などでの模擬選挙を通じ、若年層を対象とした啓蒙活動を進めていきます。

■投票率の向上を目指した活動を実施
「投票に行こう！」キャンペーン等の啓蒙活動を積極的に行い、市民全体が政治に参画する運動を展開します。

■まちづくりのシンクタンクとしての活動を実施
定期的にまちづくりに関する政策を立案し、発表するだけでなく、政治家との積極的な対話を行い、まちづくりシンクタンクとしての提言を行っていきます。

## 社会を創るその9
## 「自己表現力」を存在力へ

### YOSAKOI北九州!

●このまちの一体感をもっと生み出したい。まちの人の魅力をもっと発信したい。子どもや若者たちの表現欲を満たすと同時に、彼らの表現力を刺激したり、「ソフトへのモノづくり」を志向する若者を発掘し育てたい。老若男女が一丸となって、楽しみながらコミュニティを育てたい。そんな想いをカタチにしたのが『わっしょいYOSAKOI北九州』です。

●北九州は、ハードばかりでなくソフト(人材)も無限の可能性(潜在力)を秘めています。この潜在力を引き出し、高めていく手段として『わっしょいYOSAKOI北九州』を展開していきます。

●「新しいモノを創造すること」、これはをものづくりのまちとして発展してきた北九州の潜在力の一つであり、まちのアイデンティティだと考えます。「わっしょいYOSAKOI北九州」をまちのアイデンティティがたくさんつまった北九州市民共通の祭りとして育てていくと同時に、この祭りをまちの元気を多くの人に知ってもらう絶好のメディア(媒体)と位置づけ、「わっしょいYOSAKOI北九州」を通して北九州の魅力、北九州市民の気概を全国やアジアに発信し、北九州の活性化に貢献します。

## 社会を創るその10
## 「美しいまちづくり力」を存在力へ

### わっしょいキレイにし隊!

●北九州JCでは、わっしょい百万夏祭りの際に まち美化運動『わっしょいキレイにし隊』を実施しています。この展開をさらに発展させるべく、以下の取り組みを行っていきます。

■スタンプラリー形式等、リサイクルのシステムを体感できる総合学習向けのソフトを企画し、実施します。

■社会見学・体験学習としてのエコタウン等の利用促進を教育委員会等に働きかけると同時に、事前研修もしくは事後研修として『わっしょいキレイにし隊』への参加協力を促します。

■将来的には、教育プログラムや生涯学習の一環として『わっしょいキレイにし隊』を含めた環境体感プログラムづくりを目指します。

■環境体感プログラムに参加した人の中から多世代で『わっしょいキレイにし議会』を設立。子どもたちをはじめ、議会参加者の意見を取り入れ、3~5年計画できれいなまちづくりを目指した条例策定を目指します。また、『わっしょいキレイにし議会』参加者に、地域の公園づくりを委託する等の検討も行います。

■北九州市は官民一体となってきれいなまちづくりを推進する立場からポイ捨てに対して罰則を強化し、日本一キレイで厳しい条例を制定することも考えられます。

●また、祭り期間だけでなく、まち美化意識の高い市民が数多く存在し、日頃からいろいろなまち美化イベント等が行われる北九州になることを目標に、将来的には現在のJC単独運営から官民連携のもと、JCも参加する市民活動へと育てていきたいと考えます。

## 社会を創るその11
## 「関門海峡力」を存在力へ

### 世界遺産へ。関門広域市構想!

●北九州JCは昨年より、下関JCと協働で海峡都市推進実行委員会という組織を作り、JCとは離れた視点で『海峡ミュージックフェスティバル2002・2003』『関門まちづくりワークショップ』(全3回)を行ってきました。

●海峡という括りで両地区を考える時、それぞれの地域にはそれぞれ抱える問題があり、『海峡』という財産を両地区の発展に生かすためには、両市が行政区にとらわれない『海峡都市』という認識でまちづくりを考える場を設け、共に活動していくことが重要です。

●その際、両市民が共有できる明確な目標が必要だと考えます。

『関門を世界遺産として次代へ』

この大きな目標を掲げ、北九州JCは下関JCをはじめ関係団体等と協働で『(仮称)関門まちづくり協議会』を設立します。そして継続してこの地区の発展に寄与することのできる事業を提案し、実行していきたいと考えています。

●海峡いう世界にも類を見ない素晴らしい財産を生かすために、私たちは『関門広域市(関門海峡文化都市)構想』の実現化を進めます。

北九州JCは、

ここに示す取り組みを基本としながら、

このまちの「潜在力」を

「存在力」に高めるという使命感と、

失敗を恐れず挑戦していく勇気や情熱をもって

本気で、そして果敢にまちづくりを行っていきます!

## 地域資源や文化の産業化
## まちづくり・郷土愛づくり

■「CLO(文化版TLO)」をつくる理由■

### 地域経済活性化・まちづくりの競争力・地域社会の絆再生の鍵をにぎる 地域資源や文化の活用

●地方分権化は地域の自立した経済活性化と同時に地域の独自性が求められるようになります。
この地域の独自性とは地域独特の資源のことであり、地域の歴史・伝統・文化に他なりません。

●すでにまちづくり等の中で地域特産品開発や地域ブランド開発が重要視され、盛んに行われはじめていますが、それらの展開は、基本的に地域独自の歴史や伝統・文化を基本資源として捉えて開発されるものです。

●また、北九州JCが提案する「北九州ブランド推進協議会構想」も、地域の伝統・文化の活用なくして展開することはできません。

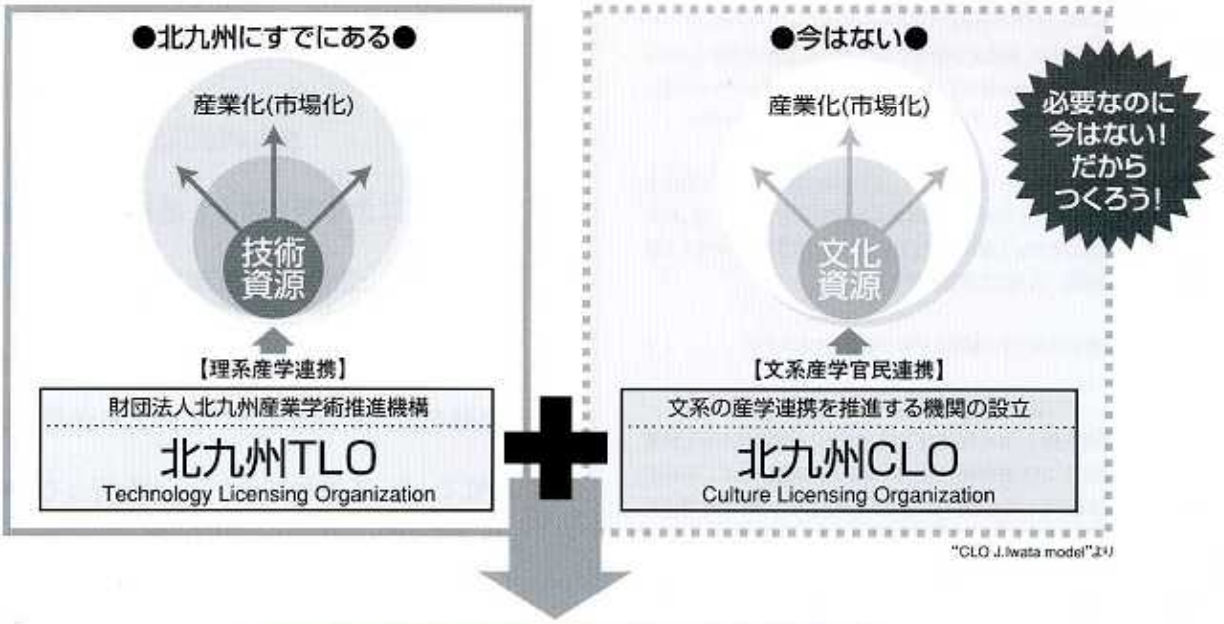
●地域の歴史・伝統・文化を掘り起こし、市民に伝えていくことは、郷土愛やまちに対する誇りを育てることにもつながり、その継承を通して失われつつある地域の絆を再生させることにもつながります。

●このように、地域の歴史・伝統・文化の活用は、経済活性化・まちの競争力づくり・郷土愛づくり・そして人づくりと多岐にわたり重要なものなのです。

●北九州市では、地域の産業技術を活用する取り組みがすでに行われています。
その象徴的存在が大学等での研究成果や新技術を産業界で活用するための橋渡しをする機関である「TLO(Technology Licensing Organization)」です。
北九州市には「TLO」はもちろん、その活動をはじめ、産学官共同による研究開発や学術研究の推進、産業技術の高度化と地域企業群創出・育成を行う「財団法人北九州産業学術推進機構」がすでにあり、理系の産学連携を進める環境、北九州の技術資源を生かす環境ができています。

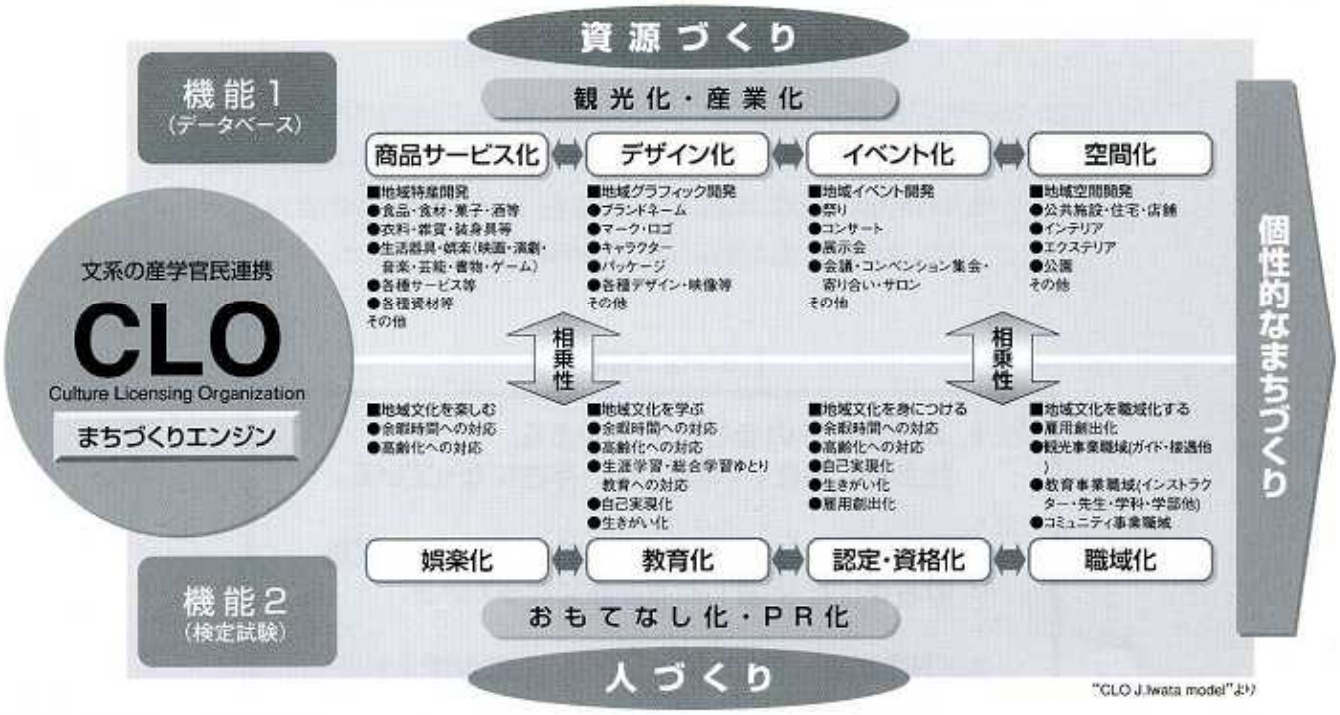
●しかしながら、理系(技術系)の産学連携だけで、地域経済活性化やまちの競争力強化を解決しうるものではありません。
技術資源の活用だけでなく、地域の文化資源の活用も同時に行い、この両輪を持って地域振興を行っていくことが必要ですが、「地域の文化資源を地域振興に活用する機関やシステムが北九州にはない」のが現状です。

●そこで、「TLO」の文化版であり、文系の産学官民連携を行う「CLO(Culture Licensing Organization)」および、CLOを用いた地域の文化資源を地域振興に活用する機関やシステムづくりを行っていきます。



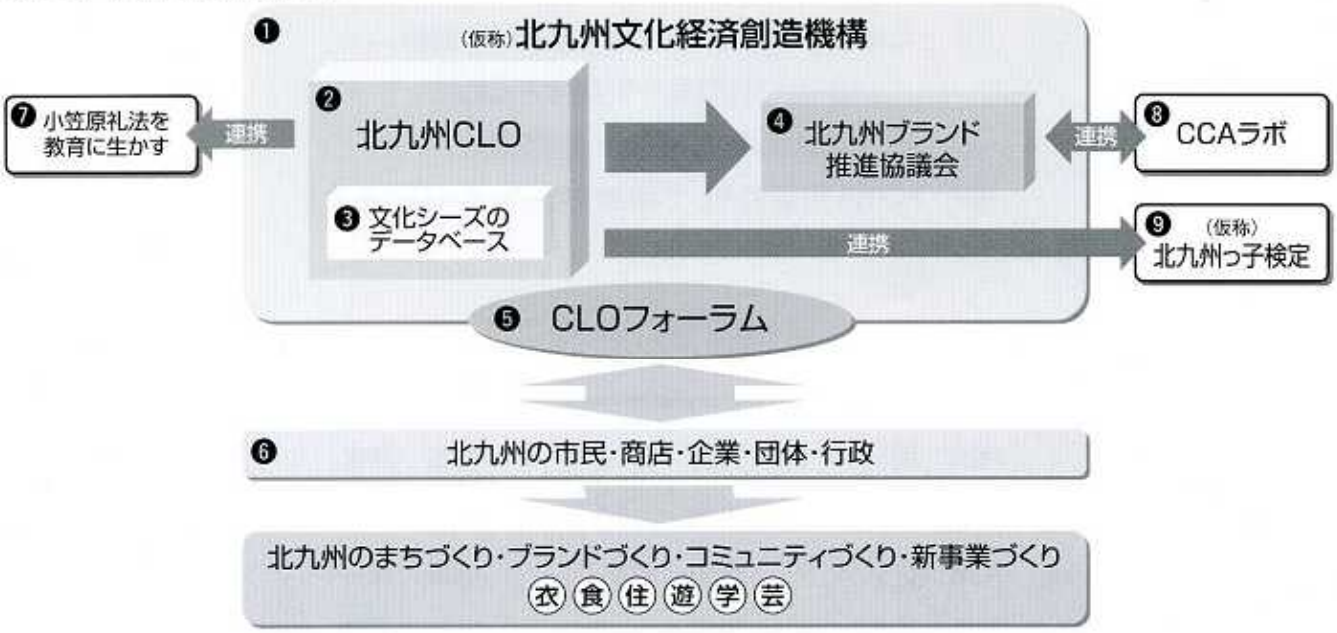
## ■「CLO」の機能イメージ

「CLO」は、資源づくりと人づくりの2つの機能を持つ、「まちづくりエンジン」です。




"CLO J.Iwata model"より

## ■文系の産学官民連携仮説イメージ




**【機能・役割等】**
上図番号にそって説明

❶経済・経営・商学等から芸能・デザイン・工芸等まで文系の才能の創発力や研究力により、新市場を創造し、事業化・産業化、CLO等の推進・支援を行う機関。
北九州JCが行政・大学・団体等に働きかけ設立。

❷北九州の歴史・伝統・文化等の資源を観光や商品・事業づくり・人づくり等に生かすための研究等を行う産学官民連携機関。
文系大学・CCA等関係団体・個人・行政・北九州JCとの連携で設立。

❸北九州の文化的知財(歴史・自然・文化・芸能・工芸等)を誰もが使いやすく、商品化事業化発想しやすいシーズ(種)のカタチにしてデータベース化されたもの。
当面は、北九州JCが運営管理を行い、将来的にはCLOもしくは機構が運営管理。

❹北九州の固有の文化・伝統・歴史等を活用し、環境・食・都市イメージの北九州ブランド化を推進する。
北九州JCが主体となり、関係団体・個人に働きかけ設立。

❺データベースを活用し、商品アイディアや事業イメージを思いついた個人や企業等とCLOの各専門アドバイザーがこの倶楽部を通し、一緒に事業化等を行っていく実践の場。
CLOを中心に展開。

❻CLOのデータベースにインターネットでアクセスし、データベースの知財を基に事業化や商品化を考えていく積極的な個人や企業等。
会費による参加。

❼北九州JC50年代運動指針「社会を創る」その5「教育力」を存在力への事業。
北九州JCが小笠原礼法の知財を管理し、CLO等との連携により、教育づくりに生かしていく。

❽北九州JC50年代運動指針「社会を創る」その3「知・芸術力」を存在力への事業先端学融合ラボトリー構想。
CCAを主体に北九州JCとの協働で展開。CLO等との連携も行う。

❾北九州JC50年代運動指針「社会を創る」その4「I LOVE北九州力」を存在力への事業。
CLO等のサポートを受けながら、北九州JCが主体となりフラッグシップ事業として展開。

【おわりに】

# 私たちは本気です！

## 10年後の目標像を目指して

JCは、毎年理事長が替わり、年度毎に組織が編成されるという宿命を持っています。
しかし、ここに示した「NEXT50」運動指針やその精神は、忘れることなく受け継いでいきます。
そして、時代の変化に柔軟に対応しながら、自らを、このまちを成長させ続けます。
このことを胸に、北九州JCは10年後の目標像をつくりました。

【10年後の目標像】

1. JCメンバーの会社は元気がある。
社会的にもなくてはならない存在になっている。

2. 「現在の活力ある北九州は、あの時のJCの運動のおかげだ」と言われる存在になっている。

3. 「日本のJC運動の流れは北九州JCが変えた」と、言われる存在になっている。

**このまちの「潜在力」を「存在力」へ高め、**
**10年後の目標像を実現するために、**
**私たち北九州青年会議所は、**
**まちづくりの先駆者として情熱をもって走り続けます！**

【「NEXT50」運動指針策定メンバー（50音順）】

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 鮎川　学夫 | 角田　周一 | 斉藤　智樹 | 須藤　義宣 | 曽我部駿輔 |
| 田園　直樹 | 辻　敏晴 | 中柴　崇 | 羽柴　泰輔 | 濱方　保 |
| 濱田　時栄 | 久岡　貴弘 | 平山　敏史 | 福嶋　真一 | 藤上　良裕 |
| 藤永　高治 | 宝亀　達也 | 前田　一 | 松尾　孝治 | 森　浩明 |
| 山重　浩二 | 吉田　幸正 | 吉田　光慶 | | |

「NEXT50」策定委員会事務局・メモリアル50「未来からの風」委員会

委員長：脇野　正裕　　副委員長：井上　修久　　副委員長：藤永　高治
運営幹事：中尾　正幸　　運営幹事：向野由岐子
委　　員：伊藤　恵／萩森恵美子／藤本　哲哉／舟木　和博／古本　達也
星山　斗鳳／宮原　英明／本松　英治／森繁　賢一／吉本　竜男